



## 同時代を見る眼と博物館

丸山 泰明 (COE 研究員・PD)

近年、昭和30年代の生活文化に関するモノを資料として収蔵し展示する博物館が現れるようになってきた。テレビ・冷蔵庫・洗濯機などの電化製品やインスタント食品・プラスチック製品などが展示され、また家での暮らしや商店などの生活空間がまるごと再現される。これらの展示では昭和30年代が以前と比べて生活のあり方や環境との関わりあい方が大きく変わった時代として捉えられ、民俗学や歴史学のみならず産業技術史やデザイン史といった角度からも扱われているが、博物館側の意図とは別に、いわゆる「昭和レトロブーム」と連動してマスメディアや来館者からはノスタルジアの対象として消費されてしまうというジレンマもあるようだ。今年「昭和80年」に相当するのだが、経済的なゆとりがありながらも何となく満たされない思いを抱いている老人が、充実し輝いていた30代の壮年の頃を懐かしく振り返っているようなものなのだろうか。

ところで、その当時、生活が激変していく日常をモノから捉えようとする視線は民俗学に存在しなかったのだろうか。実は、全く存在しなかったわけではない。日本常民文化研究所の理事長を務めたこともある桜田勝徳は、1966年に発表した論文「近頃の物質文化の変貌について」(『日本民俗学会報』44号)でモノを通じた生活変化の問題を指摘している。人々の服装は和服から洋服へと変わり、素材も木綿や麻・絹から化繊や人絹といった人造の繊維に変わってきた。漁村へ調査に行くと、数年前にはまだ見ることができた日本独自の伝統的な造船技術が崩れ去り、キール船やアラバ骨と呼ばれる西洋風の造船になっている。左官が泥を捏ね、海草で作った糊や切藁を混ぜて木舞に塗っていく、鎌倉時代の絵巻物でも確認することができる左官の技術は、石膏を固めたボードと呼ばれる穴のあいた板に工場製の糊を混ぜた石膏やセメントを塗るものになっていった。さらにその後になると、クロス(壁紙)が普及し左官の技術そのものが廃れていく。中学卒業後に修行し身につけた技術を時代の変化により捨てて行かざるを得なかった元左官職人を父とする私にはとてもリアルな話である。桜田は言う。「このような重大な変貌期に運悪く際会した以上は、われわれ民俗を調べてきたものとして、民俗の変わっていく過程をなるべく具体的に記録して、後の世代のわれわれの村や民族といった共同体の上に築かれたものの変化を、納得づ

くでうけとってもらえるような配慮を、何とかやっておく責任を感じず。しかし幅の広い民俗の今日の変貌をそうそう追跡することは到底できるものではない。そこで形ある物の変り方に限定して、その窓口から変化の相に入っていくことを心がけてみたいものだと思うのである。」

桜田は「現代における民俗変貌への対処の立場から」(『日本民俗学大系』2巻、平凡社、1958年)などによって、早い時期から民俗学の社会変化への対応を指摘していた民俗学者だった。1960年代は民具・民俗資料の概念が民芸(品)と差異化しつつ手作りの/伝統的なものへ囲い込まれていった時代であり、1963年からは文化財保護委員会による「民俗資料緊急調査」が行われ、1965年には『民俗資料調査収集の手びき』が出版されている。この号はこのような時代を背景として物質文化を特集しており、田原久「有形民俗資料の保護について」、中村たかを「民俗資料の保存管理について」といった有形の文化財としての民具・民俗資料をいかに収集し保存していくかについての論文も収録されている。この時代に形成された「民具・民俗資料である/ない」とする規範が、いまなお博物館での収集・保存・研究の方針に影響を与えているのだが、だとすればこの号は、その後の進み方を決めていく分岐点だったとすることができるのではないだろうか。

何も、桜田の先見の明をただ単に評価したいわけではない。桜田の指摘を真に現代において引き受けようとするならば、次のようなことが言えるのではないかと、いうことである。つまり、今日、博物館資料として収集すべきなのは、需要と供給のバランスにより決まるとされてきた価格を一律に設定し、モノや購買に関する意識、モノの生産現場を変えつつある100円ショップの品々なのではないか。「服の下に着る」という文字通りの意味をはるかに超え、異性/同性の、時に脅迫的な視線に応じて「理想的なライン」へと身体を整形していこうとする女性下着なのかもしれない。写真を「晴れの日の特別な技術によるもの」から変えていった、いわゆる「使い捨てカメラ」やオートフォーカスのカメラ、デジタルカメラやカメラ付きケータイなのかもしれない。「過去」と「未来」の視点から「現在」を異化し、博物館資料として捉えていくこと。試されているのは、同時代を歴史化していく我々の「眼」だと思われるのである。